「自立と体験 1」導入の経過報告

榎　本　達　彦※

1. はじめに

明星大学では 2010 年度より全学初年次教育科目として、「自立と体験 1」を開設した。学部横断、65 クラスによる運営ということで、困難を極めたが、その困難が故に得られた成果も少なからず見られた。

以下、「自立と体験 1」の導入の経過を中心に報告をする。

2. 導入の経緯

(1) 学内の状況

本学では、「自立と体験 1」の設置に先だって、大半の学科に初年次教育的な科目が設置されていた。それらの科目の意図は、スタディ・スキルの修得であったり、専門基礎への導入であったり、あるいはリメディアル的なものであったりと、学科によって多種多様であった。また、2005 年度からは、本学の教育理念のひとつである体験学習的要素を取り入れた「自立と体験」という 1 年次必修科目も設置された。しかし、この科目も位置づけこそ全学共通科目であったものの、実施の単位は学部・学科ごとであったため、実際の授業の目的・内容・方法などは部局によって大きく異なっていた。

他方、近年のユニバーサル・アクセス化の影響により、学生の学習意欲の低下傾向や、それに伴う離籍者の増加などが、学内の懸案事項となっていた。こうした状況を打開するために、学生の学習意欲を向上させるための初年次教育に大学を挙げて取り組む必要性が、2007 年頃より学内の一部で認識されるようになっていた。

(2) 導入までの準備・調整等

以上の流れを受けて、2008 年 12 月より、全学初年次教育の目的・内容・方法等を検討する諮問委員会が立ち上げられた。委員会での検討経過及び結果は各学部教授会に報告され、その都度、教授会構成員から意見が聴取された。教学に関する意志決定プロセスにおいて典型的なボトム・アップ型の大学である本学においては、予想通り、強硬な反対意見も提出され、学内の意見調整は難航した。寄せられた批判の多くは、学部・学科横断型クラス編成に集中した。しかし、この科目を設置すること自体は、2009 年 3 月に大学評議会（学部を超える全学的な教学事項についての審議機関）において承認され、2010 年 2 月には、学部・学科横断型クラス編成も含めて、委員会答申に基づいて学長が作成した「自立と体験 1」の実施案が大学評議会において賛成多数により承認された。

このように、「自立と体験 1」導入へ向けての実質的な準備期間は一年半足らずであったが、この間、本学ではつぎのような準備を行った。

・他大学における初年次教育の実施状況についての情報収集

・初年次教育に関する全学的 FD 研修会の実施（3 回）

※ 人文学部特任准教授　明星教育センター

・シラバス、教案、ポートフォリオ、自校教育用 DVD 等の作成
・様々な問題を抱えている学生への対応マニュアルの作成
・「自立と体験 1」を管理運営する「明星大学明星教育センター」の開設準備
・主に「自立と体験 1」を担当する 5 名の特任教員の採用
・2010 年度に「自立と体験 1」を担当する 45 名の専任教員を対象とした研修会
・ティーチング・アシスタント採用の準備

3. 授業の実際

(1) 授業運営計画の概要

事前の計画は「2.―（2）導入までの経緯」でも述べたが、特任教員の採用時期は本年 4 月 1 日であったため、授業開始前の準備は全学初年次教育運営準備委員会が進めた。

① シラバス

教育目標のもと到達目標を設定し、全 15 回の講義を行う。授業は全体を 3 部構成にしている。第 1 回～第 5 回は協働学習を通して、グループのメンバーや先輩学生とのコミュニケーションや交流を図るタームである。この授業の中心的手法である、「発表リレー」や「一問一答インタビュー」や「振り返り」について、学生はここで理解することになる。

第 6 回～第 11 回では明星大学を知るためのタームである。図書館や学生支援の各部署を訪問して課題を解いたりという協働作業や各部署への取材などをする。また、自学教育では、学長の講話、明星大学史の DVD を活用している。さらに、学内のマナーやハラスメントをテーマにして、自らの学生生活を考えるきっかけを与えている。

このタームでは、普段授業をする教室を離れ、他のクラスと合同で移動をし、再びホームルームに戻り協働学習をするという「ローテーション授業」を行っている。協働学習では調べてきた内容をグループ全員で模造紙にまとめ・発表したり、マナーやハラスメントについての意識の共有化を図る。

最後の 11 回～15 回は学生が自らの 4 年間をデザインするタームである。その際、先輩の進路インタビューを使った「卒業生パズル」、社会人へのジョブインタビュー等を活用し、職業意識を養い、人生イメージを作り、そのイメージに向けて自らの 4 年間を描く。

② ポートフォリオと教案

当授業では、50 名の教員が 65 クラスを統一的に授業をするために、共通の教材としてのポートフォリオと教案を作成した。ポートフォリオは、1 冊にまとめられ、学生が将来就職活動をするにあたり、4 年間の成長の記録として就職活動時期など、この先も活用されることになる。ファイルには、授業で配付された資料や授業での成果物を挟み込むことも出来る。

ポートフォリオの冒頭には、シラバス、明星大学の教育目標、授業の目的、到達目標、授業の約束事、授業で使う「発表リレー」や「一問一答インタビュー」の仕方等が書かれている。以降のページは各回の授業のワークシートである。ワークシートの基本は個人記入→協働作業・体験→振り返りの統一パターンが基本である。

教案については、45 名の専任教員が授業を進めやすくするための説明書である。その回の授業のねらい、基本方針が書かれており、教員が授業を進めるための方向性を知ることも出来、また学生に授業の最初に説明をする時に使うことになる。実際にこのような協働学習になれていない専任教員が授業を進めるために、90 分のタイム

スケジュールや授業を進めるに当たっての一口メモなどが書かれている。また、後述する「授業運営補助資料」が教案をサポートする形でほぼ毎回出されている。

③ 専任教員の役割

「自立と体験 1」では各学部学科より選ばれた 45 名の専任教員と 5 名の特任教員が授業を担当している。基本的に専任教員は週 1 コマ、特任教員は週 4 コマとなっている。

担当教員の役割は、学生に教えるというよりも、個人ワークや体験をきっかけに一人ひとりの気づきや学びを促し支援することにある。また、ポートフォリオを 15 回の授業中に 3 回提出させ、学生へのメッセージを記入する。このメッセージは評価的な内容ではなく、学生を勇気づけたり、さらに考えを深めさせる内容となっている。

④ 特任教員と明星教育センターの役割

「自立と体験 1」の授業において、明星教育センターの 5 名の特任教員は授業の実施、欠席学生の管理、担当グループ教員のサポートなどを行う。

欠席学生の管理は、「無断で 2 回連続授業を欠席した学生」に対して電話連絡をし、出席の勧告、指導をするものである。通常の授業よりも厳しい出席管理をするのは、授業に出席する習慣づけ（明星大学の教育理念；手塩にかける教育）や初年次教育科目であることから 1 年次で修了させたい、学生生活への不適応の発見という意味がある。

担当教員のサポートは、5 名の特任教員をリーダーとし 45 名の専任教員を 9 名配置し、授業のサポートを行うものである。上述の欠席学生への電話もグループの専任教員分を特任教員がフォローする事となる。

明星教育センター事務局は「自立と体験 1」の授業運営の支援を行う。追加の教材の作成、授業運営補助資料の作成配付な、TA/SA の管理、資料の作成など、授業運営の土台を支えている。

明星教育センターの下に、初年次教育委員会が設置されており、「自立と体験 1」の実質の運営を担っている。特任教員は初年次教育委員会のワーキンググループ的な役割を担い、同委員会に対して、授業運営等の実際的・具体的な提案・助言を行っている。

(2) 運営上の工夫・改善

4 月から授業を開始し、授業を運営する中で様々な問題が見えてきたし、そのための改善や工夫が行われてきた。

〈授業状況に即した改善〉

① ランチミーティング・ニュースレター・授業運営補助資料の循環

ランチミーティング（下記②参照）でその日に行った授業の内容を参加教員が発表し、意見交換をしたり、疑問点を話しあう。その内容はニュースレターという形で翌週、ランチミーティングに参加できなかった教員にもフィードバックされる。また、ランチミーティングで出てきた問題点を、ランチミーティング後の 5 名の特認教員による打ち合わせで討議し、解決策を考える。そして、場合によっては、授業運営補助資料として作成し、教案の補助や授業をうまく進めるための追加のワークなどを提案する。

具体的には、授業がスムーズに進むようにどんな言葉を学生に掛けたらいいかや、アイスブレーク的な簡単なワークを提供したりする。

② ランチミーティングの効果

ランチミーティングは毎週金曜日の授業後昼休みに設定している。基本的に自由参加で、自分の行った授業の様子を発表してもらい、情報交換や問題点の討議などを行った。

前 15 回のランチミーティングで下記のような効果があった。

－他の教員の工夫の共有や現状把握
－授業終了後すぐに担当教員が話し合うことで生の意見が出る
－共通の問題点の早期抽出とすみやかな解決
－担当教員同士での学部学科を越えたコミュニケーション
－専任教員と特任教員、明星教育センターとの関係作り

③ 授業運営補助資料

教案の補足として授業運営補助資料を作成している。当資料はポートフォリオや教案作成をより使いやすく、授業を進めやすくするための追加説やワーク、また全体の時間管理のアドバイス、学生への声かけ、語りかけのヒント等を書いている。これは、協働学習経験の少ない選任教員が授業を組み立てやすくするための工夫でもある。当資料の中には､次年度教案に組み込むべきものも､教案よりは補助資料として配布した方がいいものもある。

〈授業運営上の工夫〉

65 クラスを同時に運営するため、ポートフォリオや教案以外にもいろいろ工夫がある。一つは、60cm × 40cm のナイロンバッグである。このバッグは担当教員ごとに用意してある。中には授業に必要な教材や資料、追加のお知らせ等を入れ、授業の前日には教員が持っていかれるようになっている。また、教員ごとの棚を作り、資料をその棚に入れることで、資料等が渡らないというミスを防いでいる。

ローテーション授業を運営するための工夫として、授業ごとに必要資材をまとめて封筒に入れて渡している。ローテーション授業では毎回行く場所が変わり、また教室に戻ってのワークも行うので、スムーズな進行のために配付資料などが分かりやすくなっていることが重要になる。

授業で使う資料は、明星教育センターの事務局が行う、その際各教員への配付資料や連絡メモなどは全て、各教員毎に設置されたロッカー形式の棚に入れられる。教員や担当の TA/SA はその該当する教員の棚に入っている資料を授業に持って行けば良いことになる。

4.「自立と体験 1」の特色

以上のような経緯で導入された「自立と体験 1」は高大接続という意味での初年次教育であると共に、1 年次に広範囲に明星大学教育を体験し、理解する授業である。以下に「自立と体験 1」の特徴を述べる。

① 学部学科横断型のクラス編成

「自立と体験 1」は入学した学部学科の枠を越え、全学生を混合のクラスを編成しており、各クラスにはほぼ全学科の学生が含まれている。ここでは、多様な学生同士が交流し、協力して学び合うという体験をする。

これまで、クラブ・サークルに所属する学生以外は他学科の学生との交流はほとんど無かったが、この授業を通して異なる学科同士の交流も増えることにより、大学生活の充実や大学の活性化が期待される。学生自身も多様な人間関係を体験することで将来の社会人生活に役立つと思われる。

② 各学部の専任教員が、他学部の学生も含めて担当する

「自立と体験 1」を担当する教員は、45 名の専任教員と 5 名の特任教員である。各学部学科から推薦された教員が 65 クラス中 45 クラスを担当する。

ほとんどの教員は少人数の協働型学習やファシリテーションの経験が無いが、共通のカリキュラム、教材、教案を通して授業を受け持つことで、協働学習の手法やファシリテーターの手法を自らの専門教育活用が期待できる。授業を炭層する事がすなわち FD につながるのである。

③ 共通のカリキュラム、教材、教案を使用

「自立と体験 1」は授業の設置を進めるのと平行して、カリキュラム作り、教材・教案の作成が進められた。これは協働型学習に不慣れな教員にも授業を進めやすくするための工夫である。協働型学習も「体験→個人作業→協働作業→振り返り」という統一のパターンで進行する。この繰り返しの中で、学生たちは教員の問や、アドバイスや、声がけを受けながら様々な気づきと学びを体験することになる。

④ 少人数制の協同学習、体験学習

「自立と体験 1」は 1 クラス 30 人という少人数制を取っている。各クラスは 6 名による 5 ～ 7 グループに分けられ、協働学習、体験学習を行っていく。教員はクラスの学生の氏名と顔を一致させることが出来、かない細やかな対応が可能である。

特に高校から大学という環境の変化に対応することが学生にとっての大きなストレスとなる中、少人数小グループによる授業それ自体が、学生に安心感と居場所を提供するという意味がある。最低でも 1 回多いクラスでは 4 ～ 5 回グループを変え、その都度新しい友人が出来る仕組みもある。

⑤ 5 名の特任教員

「自立と体験 1」は 5 名の特任教員が専任教員と一緒に講義を受け持っている。特任教員は協働学習やファシリテーション、学生指導に特化した教員であり、授業を受け持つだけでなく、専任教員への支援やアドバイス、授業の運営全般にも関わっている。

専任教員は 9 名ずつ 5 グループに分けられ、各特任教員が各々グループのリーダーとなり、質問を受けたり、授業の進め方のアドバイス、学生の出席管理のサポートなどを行っている。

また、授業を進めるにあたり、様々な問題を発見し、その為の措置をする。

⑥ 自学教育

「自立と体験 1」では、明星大学教育の歴史や理念について学ぶ時間を取っている。偏差値の輪切りにより入学して来る学生が多い昨今、大学へのロイヤリティは弱まる傾向にある。そんな中、自学教育により大学への関心、誇り、愛情等を感じるきっかけになればと考えている。

明星大学の歴史を 10 分ほどにまとめた DVD を鑑賞し、20 分ほどの学長の講話を聞き、個人ワークや協働学習をすることで、自ら明星大学への理解を深めるプログラムとなっている。自学教育はローテーション授業の一つとして、全クラスが 6 グループに別れ行われる。どの回も学長自らが、明星大学の歴史と教育理念についての講話を行う。

⑦ 体験教育

「自立と体験 1」では、教室内で作業をするだけでなく、図書館、学生支援の各部署、学長の講話、臨床心理士によるハラスメントの講演、部活・サークルの先輩との交流など、教室外に出て大学生活を様々に体験する。少人数クラスやグループで教室外に移動する中で、教室では体験できない教員やクラスメートとの交流を体験することにもなる。

身体を動かして学ぶという体験教育は明星教育の根幹の理念でもあるのだが、学生たちはより活発に行動し、感じ、考え、学ぶ事になる。

グループでの協働作業も単に討議するだけでなく、模造紙にグループの意見を書き・描くという作業をするが、このような身体を動かす作業はグループやクラスの活性化につながり、普段おとなしい学生も活躍し出すきっかけともなる。

⑧「発表リレー」と「一問一答インタビュー」、「発表」

「自立と体験 1」では、協働学習の進め方として「発表リレー」と「一問一答インタビュー」の 2 つの手法を中心にしている。

（両手法の説明をポートフォリオから取り込む）

時に協同学習の内容を、クラスの中でグループ毎に発表する事もある。自分たちの考えを全体に発表し、各グループの考えをクラス全体で共有する意図がある。

⑨ TA ／ SA の活用

TA ／ SA は資料や教材を運んだり、配布・回収したりという物理的な補助のみならず、グループ討議中に、各グループを回って学生に声かけをしたり、活性化していないグループに入ってアドバイスや適切な意見を投げかけるという役割も担っている。そのため、今年度は TA ／ SA を対象とした研修を行い、「自立と体験 1」の授業の狙いや TA ／ SA に期待されることなどを伝えてきた。

また、TA ／ SA はほぼ決まった教員とペアになるので、明星教育センターと担当教員とのパイプ役も担うこととなる。毎回日報を書く事になっているが、それは 65 クラスの授業のおおよその様子を知るきっかけともなり、明星教育センターと担当教員との関係をスムーズなものとするきっかけともなっている。

TA ／ SA に対しては、便利に使うというだけでなく、この授業に関わることで本人たちの成長を期待している。

以　上